HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代経済社会とキリスト教 ： 主として資本主義の歴史的分析を中心に
Author(s)	石沢, 澈
Citation	基督教学, 2, 48-51
Issue Date	1967-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46207
Type	journal article
File Information	2_48-51.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

現代経済社会とキリスト教

――主として資本主義の歴史的分析を中心に――

石澤澈

一、資本主義経済の成立に関する諸家の見解

資本主義なる用語は、純粋経済学者はみとめない。マルクスも定義しなかった。ゾムバルトが定義して、生産手段の所有者と無所有の労働者が市場で結合される一つの流通経済組織であるとした。彼はまた資本主義を三つの時期に区分し、初期資本主義、高度資本主義、後期資本主義とした。そして、資本主義には資本主義精神があると考えた。資本主義の本質と起源に関連して、資本主義精神の分析で、ウエーバー、トレルチと、ルヨ・ブレンターノ、ゾムバルトの見解が対立した。論争のきっかけとなったのは、ウエーバーの「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」なる名著が出されてからである。

ウエーバーによれば、資本主義精神とは、個人的放縦と感性的欲求を禁圧する世俗的禁欲主義の職業倫理、ことに禁欲的プロテスタンチズムの職業倫理観が、中世的な倫理観から、「倫理の転換」をもたらしたという。トレルチは、ルッター派はその点では中世的であったが、カルヴアン派が「倫理の転換」をなしとげたとして、ウエーバーの意見を支持した。それに対して、ルヨ・ブレンターノは、資本主義精神とは、無限なる営利欲であって、ルネッサンスと宗教改革以来、従来の大商人や高利貸が、中世の束縛から解放されて、自由に営利のために活動し始めたによるとした。ゾムバルトは、中世後期以後、大商人や高利貸が、営利のために営利するという無制限な生産を始めたによるとした。

R・H・トーニーは、「宗教と資本主義の勃興」で、英国の歴史的現実に照して、ウェーバーの見解の修正を試み、ルッター、カルヴアンの経済倫理は、中世的であったが、フランクリンなどにみられるピューリタニズムでは、宗教（教会）は個人の魂の指導と支配の領分に退き、社会生活の指導面から後退し、「神の栄光のため」という大義が失なわれ、教会は社会正義や社会生活に無関心となり、本来の資本主義は著しい発達をみたとし、実践生活の課題を提起する。日本では大塚久雄教授はウェーバーの見解を支持し、柿原厳教授は、フランクリンの資本主義精神は、啓蒙主義哲学の生んだ子であるという。

二、現代社会の状況把握の方法

ウェーバーは、その著で、欧州近代社会の特質の分析を目的とし、近代社会を資本主義社会と認識した。トレルチも「プロテスタンチズムと現代世界」などでは、近代社会文明の精神を資本主義精神にありとみた。しかし、トレルチは「啓蒙主義」及び「宗教改革とルネッサンス」では、啓蒙主義こそは、近代社会の始まりであり、成立であるとし、ルネッサンスも宗教改革も、後向きのもの、中世色の濃厚なものであり、啓蒙主義に始まる近代社会成立への過渡期、準備期であり、中世的統一の分裂・分極化であるとみている。

ウェーバー、ブレンターノ、ゾムバルト及びマルクスらの時代は、自由主義的資本主義が生み出せる労働問題の発生、労資の対立から、資本主義是か、社会主義是かが問題とされた時代であるが、我々現代人は、より根本的な文明の危機に直面させられて、近代社会の性格を、より根本的に把握することを求められている。問題は資本主義国が滅び、社会主義国が生きるかということではなく、両陣営ともに否定されるか、存続するかにある。ウェーバーも、西欧社会の合理化が生みだす非合理化の問題とみ、マルクスは階級社会の人間疎外の問題とみたが、現在にあたっては、より切迫した問にたたされていることも自覚するようになった。ヤスパースの「現代の精神的状況」でも、ベルジャエフの「新しい時代の転機に立ちて」でも、M・ブーバーの「もう一つの社会主義」でも、資本主義社会か、社会主義

社会かのテーマではなしに、現代文明そのものの危機が問われている、世界における人間の存在一般が問われている。

三、近代社会を科学技術文明の発達の上にたつ産業主義社会と定義する

トレルチが近代社会は啓蒙主義において成立したものであり、中世と異質的なものだと定義した。プリザーブド・スミスは「啓蒙主義」の著で、啓蒙主義の性格を、ヨーロッパ人の世界観を、科学に基礎をおく真理の基準を新しくたてたものであるという。クレーン・ブリントンは、「近代精神の形成」で、一七〇〇年に、ニュートンの科学的綜合が生れるまでに、科学的知識は、学問ある人々の間に浸透していたとのべている。プリザーブド・スミスは「近代文化の起源」で、近代社会はルネッサンスや宗教改革に始まるのではなくして、「科学的再生」とよばれる科学的合理主義に始まるものであり、一五四三年のコペルニックスに始まり、ベサリウス、カルダンらによる科学的再生こそは、近代文化の起源の最も著しい特色である。宗教改革とルネッサンスは後向きのものであったが、これこそは近代社会を、歴史的には前向きに進めた積極的な特色であるという。

近代社会の誕生を、科学の発遠に基礎をおく、または、それに支持されたる啓蒙主義に始まるとするならば、近代社会は経済面では、科学技術文明の上にたつ産業主義社会とみるのが、現代社会の状況把握のより適確な方法である。

近代社会をこのように把握すれば、資本主義か社会主義かの選択的テーマではなしに、より根本的な、科学技術文明の発展が生み出す課題、経済社会面では、産業主義社会の生みだすテーマが課題である。思想的には理性主義であり、科学主義であり（これはよい意味でのみいうのではない）、経済制度では、スペンサーがいった産業革命にもとづく、軍事的封建社会に代る産業主義社会である。歴史思想をみても、ボルテールによって、中世以来のボッシエの歴史神学思想が批判されて以後、神学思想は理性主義・科学主義の前に屈して、その再建がみられない。

このような定義を、日本の文明史にあてはめてみると、近世社会（江戸時代）は全国市場が成立し、商品経済が発達していたが、近代社会とはいえない。近代社会といえば、明治維新以後の啓蒙主義（文明開花）以後であり、佐久

間象山のいう東洋の道徳と西洋の芸術（科学）の文明の輸入によって始まるものである。日本の近代産業主義精神を分析してみると、近世において、貨幣獲得欲＋町人道徳（商人道徳）により、商人資本の蓄積があったが、それに、西欧の科学技術文明を採用する啓蒙主義的な企業精神がプラスされて、近代日本の産業資本主義が成立した。封建倫理から、近代的産業主義精神への倫理の転換を行なったものは、福沢諭吉らの啓蒙主義者であった。

四、現代キリスト者にとりての課題

我々キリスト者にとっては、資本主義か社会主義かの問ではなくて、より根本的な異常に発達しゆく科学技術文明の上にたつ産業主義社会で、科学主義の弊による人間疎外の問題を始め、そのような社会に即応し、それに調整されないために生じている多くの部面の弊害のあることを認識して、それを是正してゆくことに努力することである。今日では先進資本主義国といわれる国ほど、混合経済体制、即ち、国家が社会福祉や社会政策を主とするのみでなく、国家自から経済活動をなし、経済界を指導し、計画化と統制化を著しくしている時代で、自由主義的資本主義国家ではない。これを知るならば、我々キリスト者は、わが国の政治や国家社会が正しい方向へ進められるように指導性を強化してゆかねばならぬと思う。